
大家さんは高校生

こうびー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大家さんは高校生

【Nコード】

N3737C

【作者名】

こつびー

【あらすじ】

高校生なのに大家。そんな西瓜荘の大家・古木司のいろんな変な騒々しい日々。

第1話（前書き）

初めて小説を書きます。アドバイスよろしくお願いします。

第1話

今日は入学式。新入生は表情が固い、みんな緊張している。

校長の永劫とも思える長つたらしい話が終わり、やっと教室に帰れると新入生達が思ったら

ヒューン

ドカン

という音がしたと同時に辺りは白い煙りに包まれ。

「ハーツハツハツハツ」

笑い声が聞こえ。ステージには、長い髪を後ろで纏っている眼鏡をした少年が現れた。

「新入生諸君！！僕の名は古木^{ふるぎ} 司^{つかさ}だ。君達はこの片山高校に来たということは、近くの片山大学に進学するな？」

大半の新入生は心の中で肯定する。事実、片山大学へ進学する生徒は七割はいる。

「そこで卒業したら、僕が大家をするアパート。西瓜荘に来てくれないか？」

新入生達はポカーンとしている。

「もし住んで見たいなと思う生徒が居たら二年四組まで来てくれ。サービスしちゃう（はーと）」

『あと…』

「コラァア古木」いかにも体育教師という体の男が怒鳴る。

彼はヤバツと思い逃走。体育教師は追跡。全校生徒はそれをポカ
ーンと見る……体育館には影の薄い教頭の

「入学式を終わります。」という言葉がこだました。

一年生は

「何だアレ？」と戸惑い。二年生は

「今年もかよ！」と苦笑い。三年生は

「自分達の時の方が凄かったなあ…。」と思い出すのであった。

何とか逃げ切った司。

『ふう何とかまいたな。ちつ、もう一年生帰ってんじゃん。あとは
ホームルームだけか、帰ろつと』

「待ちなさい」

振り返ると、担任の月下つきした はるか 遙先生が居た

『あ、月下先生…。』

なんか少し呆れてる？

「また派手にやったわね。」

『だってえインパクト必要でしょ？』

「必要ありません。大体、校長先生から宣伝の許可はでてるんだか
ら普通しなさい。」

『相変わらずクールだなあそんなだから恋人が出来な…』

「引越すわよ？」

『すいませんでした。』即座に土下座する僕。何を隠そう月下先
生は西瓜荘の住人なのです。

『今年は卒業して引越した人多かったから、つらいのよ（泣）。』

「ならもう少し真面目に勧誘なさい。」『はい。』

「じゃあこのプリント持って」

『なぜ？いじめ？』

「私のホームルームサボって帰ろうとした罰。ほら行くわよ?」
『はい。』

プリントを持つ僕。うわ地味に重いこいつ…

そして教室に向かう僕ら…教室に行く途中、体育教師に見つかり殴られた司だった。

第1・5話（前書き）

二回目まだ一日目なので1・5話ってことで……。

第1・5話

教室に入る僕と月下先生。

するとクラスメート達はこちらを見て直ぐ目を反らす。

（うーん。嫌われてる？）とりあえずプリントを教卓に置く。

「席につきなさい。」

席に着く僕たち。

「これからクラスで最初のホームルームをします。まず、自己紹介からかな？」

誰からさせるか悩む先生。

『じゃあ、まずは先生からお願いしまーす。』

「なぜ？私から？」

わぁースゲエ冷たい視線。

『だってえ教師がまず手本を見せないと…』

「やれやれ、わかったよ。私の名前は月下遥。担当は数学だ。趣味は……」

こつちを見てくる先生…アイコンタクトで

「私の趣味何だ？」

と聞いてくるので『読書じゃない？』とジェスチャーでかえす。周りの席の奴らに変な目で見られた…ぐすん。

「趣味は読書だ。よろしく。面倒だから右端のやつから自己紹介していけ。」

そして自己紹介が始まった

「俺の名前は高地昇^{たかちのぼる}。趣味はスポーツ。みんな一年間よろしく（にこっ）」

おおっこいつ好青年だな…笑顔が光ってるぜ。やばっ次は僕だ

『はい皆さんご存知の古木司でえっす。趣味は寝ること。西瓜荘の大家やってまーす。皆さん片山大学に行くなら、是非西瓜荘へ。よろしく（ニヤリ）』

前の人見たいに笑顔をきめる。きまっただな僕

しかし周りから見たら黒い笑顔にしか見えなく、不気味に映ってしまふ悲しき司君であつた。

ホームルームが終わり、先生が

「じゃあこれで解散。各自教卓に置いてあるプリント持ち帰り読んでおけ。それでは解散。」

鞆を取って帰ろうとする僕、すると

「古木君、一緒に帰らないかい？」

とさっきの好青年。

『君はええつと・・・、徳川次郎三郎源朝臣家康だっけ？』

「高地昇だよ。君の前の席のね。それより一緒に帰らないかい？」

『君はええつと・・・、徳川次郎三郎源朝臣家康だっけ？』

「無限ループ？」

『冗談だつて。いいよ別に一緒に帰りますか。』

校門を出て

『そういえば徳川次郎三郎源朝臣家康はどこに住んでるの？』

「だから高地昇だつて・・・西瓜荘の近所だよ。」

『ちつ勧誘は無理か・・・』

「ごめんねえ」

『まあいいさ。』

それから他愛の無い話をして。

「俺こつちだから、じゃあな。」

『さいならー。』

自宅の道を一人で歩く僕だった。

短い坂の上に広い一階建ての家があるそれが僕の家。
自宅に鍵を開ける。

『ただいま。』

返事はない・まあ一人暮らしだからなあ。

ここには居ないが兄が一人それが僕の家族構成。

自分の部屋に荷物を置いて学生服から着替え、台所で夕飯作ってる
と。

ガラガラと玄関が引き戸が開き

「ごめんくださーい」

と人の声

『はーい』

料理を中断して玄関に向かう。

「やあ、こんばんわ司君。今月の家賃持ってきたよ。」

「持ってきたぞー」

二人の背の高い大学生が来た。

痩せっぽちで口調が優しいのが水上^{みずかみ}陽^{よう}
筋肉質で荒っぽい口調なのが桐原^{きりはら}影一^{えいち}

『まあお茶でも出すんであがって下さい。』

「おじゃまします。」

「じゃまするぞー。」

客間に行く二人。お茶とお菓子を用意を持って行く。

『どうぞ』

お茶をお菓子をテーブルに置く。

「ありがとう。これ家賃ね」

「ご苦労。ほれ」

『ありがとうございます。』

それからお互いの学生生活について語っているとガラガラ。

「古木」家賃持って来たよ。」

月下先生も来た。

「月下先輩久しぶりですね。」

「月下先輩久しぶりッス。」

「ああ君達も来てたのか…。久しぶりだな。」
会話をしようとしたら -

ボーン。ボーン。と古時計が鳴り

「もうこんな時間か…。飯どうする？」

『食べて行きますか？』

「いいですよ。いつもご馳走になってますから…。」

「そうだね。今日はいいよ」

「イヤここで食ってくぞ陽、先輩。司すぐに飯作れ。」『はい。少し待って下さいね。』台所へ行く僕。

「しかたないな。私も手伝うか。」

残された二人は料理が得意じゃないから待機するのだった。

「影一。無理矢理世話になるのはどうかと思いますよ?」怒り気味に言う陽。

「いいじゃねえか。」

「よくないですよ！」

「そんなに怒るなよ。あいつ一人で飯食うの寂しいなあ……って言うてたしな。俺達が家族みたいに飯食ってやろうぜ。それにあいつの食費が厳しいなら、金は出すさ。」

影一は笑顔で言う。陽は驚いて言う

「貴方は思いやりがあるんですね。」

「うるせえ。」

照れる影一であった。

一方台所では…

『これ皮切って下さい。』

「ああ。わかった。」

黙々と料理をする私達。

「なあ司？」

『なんですか？』

「迷惑じゃないか？」

『何がです？』

「いつもご飯作られるのが…。」

『そんなことないですよ。嬉しいですよ。』

彼は笑う。

『一人で夕飯食べるのは、寂しいし。誰か食べてくれるなら嬉しいです。』

「そうか。じゃあなるべく世話になろうか。」

『はい。そうして下さい。』

笑顔で答える。

彼の笑顔が綺麗で私はドキッとした。

第1・9話（前書き）

今回は短いです。

第1・9話

なんか先生の顔が赤い風邪かな…。

『大丈夫とですか？顔赤いですよ？』

顔近づける。

「なな何でもない。大丈夫だ！ただだからあんまり顔を……」
慌てる先生。

ヒュン

顔面ぎりぎりに先生が握ってる包丁の刃が掠める。回転して次の斬撃が襲ってくる！！

『うおっ危ね！先生落ち着いてえ。細切れはイヤ！。』

「すすすすまん。」

一方そのころ

「何を作ってるのでしょうか…。」

「……………さあな。」

ちよつと心配な二人だった。

『できましたよー。』

二人を呼ぶ僕。

夕飯は焼き魚。煮物。おひたし。豆腐とワカメの味噌汁。白米。を作った。

「……いただきます。」

「おかわり!!」

「よく食べますね。貴方は…」

「この煮物美味しいな。」『ああ…それはですね…』

楽しい食事だった。

カチャ カチャ

料理してないから洗い物をする。と彼らが言い今に至る。

先生とお茶を飲む僕。

ズズー

かつ会話がないよ

「ねえ」

『はい?』

「学校楽しい?」

『はい。先生は?』

「私? 普通。仕事だしね。」

『クールだなあ…。』

しばらく会話をしていると…

「洗い物終わりましたよ。」

「終わったぞ。」

『あつご苦労様です。』

二人にお茶を出す。

四人で他愛のない会話が始まる。

ボーン ボーン 古時計が鳴る。

「もう10時か…さあてと帰るか。」

「そうですね。」

「帰るか。司、遅刻するなよ。」

「はい。みなさんさようならー。」

一人になると途端に静かになるなあ

風呂入って寝るか…

ふいー今日も楽しかったなあ。

風呂に入っている僕。

一般家庭よりかなり…いや相当広いだろな…浴槽もでかい風呂場自体も広い

死んだ祖父さんが広く作っただけ…。一人暮らしには沸かすのも掃除面倒。たがら普段はシャワーのみたまにいれるぐらい。

『あがろつと。』

下着と浴衣みたいな着物を着る。パジャマみたいなもんだなコレ。

明日の朝食の為に米をといでおく。ふむ11時30分か…。

髪乾かして歯磨って寝よ。

早めの就寝する司だった。

第2話（前書き）

毎回読んでくれてありがとうございます。

第2話

『ん…。』

目が覚める。時計を見ると6：30起きるか。

『ふあゝ天気いいから洗濯するかあ。』

身支度して制服に着替えて、洗濯機を回して朝食と弁当を作る。

『んゝよし出来た。』

次は洗濯したのを干すので庭に出る。

パン パン

干していると

「おはよう。司ちゃん。」隣の家から声がする。

「あ、おはようございます。夏月さん」

声の主は 鳴島 なるしま 夏月さん かげつ

髪は肩までで、ウェーブがかかっている美人な未亡人。

『今日もお綺麗ですね。』

「あらあら、お上手ね。」可愛い笑顔だなあ。

『本当ですって』

「ふふふ。ありがとう。」夏月さんも洗濯物を干しているようだ。
少し話をしていると…

「そろそろ秋菜の朝ご飯作んなきゃ。またね」

『あっはい、また』

手を振ってバイバイしてる夏月さん。

あきな 秋菜とは夏月なんの娘さん。今年で小学5年生。

朝食を食べて歯磨きして準備万端。 7：40 余裕だな…

『さあて学校行くか…。』
学校につくと…

グラウンドで高地昇が朝練してた。

『きゃゝ昇くうん頑張つてえん（はーと）』
女の子の様な声援を送ると
ドグシャアー—
あつ盛大にこけた。

「古木君…悪ふざけが過ぎるよ。」こつちを見て答える彼。
『もおボルボルつたらあ照れちゃって』

因みにのぼる「ボル」モルボル「ボルボル」。

「人を臭い息吐くモンスターみたいに呼ばないで…。あとその声も辞めて…。」『うむ。おはよう高地。うぬは何をしているのだ？』
今度は渋い声にする。

「部活だよ…。普通にしない？あと昇でいいよ。」
『のり悪いなあ。僕も司でいいよ？』

「うん。わかつたよ司」

「オーイ昇。早くしろお！！」

「あつ先輩今行きます。また後で司。」

『うん。モルボルも頑張つて。』

「モンスターにしするな！！」

昇と別れて教室に向かう僕。

「なあ」

「何ですか？先輩」

「あいつ、古木司だろ？お前恐くないのか？」

「いえ別に気のいいやつですよ。」

少しふざけるけど……。

「あいつ……」

したんだぜ？」

「ええ？そうなんですか？」びつくりした。

「ああ。だからあんまり付き合わないほうが……」
なんだかその言葉にイラッとした。

「先輩。失礼します」

「あっおい。」

部室を後にする俺だった。

着きましたよ我が教室。ガラガラ

「あ、おはよ。司」

『おはよう。漣』

数少ない話し相手……林^{はやし} 漣^{みお}だ。髪は短い肩より上。元氣活発な女の子。

「あ……おはよう。」

『ん？君は』

「昨日自己紹介したでしょ？不二^{ふじ} 桜^{さくら}よ」
漣が教えてくれる。

んー昨日の自己紹介を思い出す。

「俺の名は林漣だ。うぬらの体を搾って血を飲んでやるわ!!」

バイオレンスそしてとっても渋い声。

「私の名前は…不二桜です。よろしく。」

ゴンー！

固い拳が頭にヒットする。

「ちよつと待てー！私はそんなこといってないー！」む…。声に出していたか不覚ー！頭の激痛に耐えて

『よろしく。不二さん。』

「ひっ！」

恐がる不二さん。ああやつぱり僕のこと怖いんだなあ…

『あつごめんね。』

教室を出る。

「桜…。あんた」

「だってあの噂…」

「信じてるの？あんなこと…」

「……うん。澪ちゃんは？」

「信じるわけないでしょ。あいつはそんなことしないわよ。」

うーんなんか教室に居ずらくなって屋上にいる僕だった。

第3話（前書き）

彼と彼女のちょっとした過去です。

第3話

季節は秋。

一年生の時のお話

月下　遥は美人である。髪は腰まで延びてサラサラの綺麗な黒髪。体もでるところで、ひっこむとこひっこんでようするにナイスバディなわけだ。身長も170ぐらいで高い。そんな容姿なら男子生徒の憧れの的だ。

「あゝあ月下って綺麗だよなあ」

「そうだなあゝああいう彼女欲しいよなあ」

「俺も」

「お前もかよ!! 実は俺も(笑)」

「あいつの家に行って何処よ？」

「さあ？まさかお前？」

「冗談だつて」

「たしかあいつの家アパートじゃね？」

「マジ！？何処の？」

「ほら一年に古木っているだろ？」

「あいつの所よ。」

「へへ(笑)しゃあさあいつ脅して月下の部屋の鍵貰つてよ」

「うわー（笑）お前鬼畜。」

「じゃあ、放課後古木の所行くぞ」

体育館の裏でたむろしている。奴ら

人それを不良と言う。

知らない人達だ。髪型や色が個性的な人達だか不良か…ん三年に不良グループがあるって言ってたな…。

『ああゝ聞かなきゃよかった。今の話。』

体育の授業だった司はめんどくさそうに呟いた。

キンコンカーンコン

「よう！！古木」

うわっ！？本気で来た。

『何ですか？』

警戒して聞く。いつの間にか教室に居るのは僕らだけになっていた。

「なあ月下って綺麗だよなあ」

『はあ』

「俺達みんな月下好きなんだよね。」

『告白なら本人の前でお願いします。』

「単刀直入に言う。月下の部屋の鍵よこせ！大家なら持ってたんだろう？代えの鍵」うわー何考えてんのこの人達。馬鹿？

『…………いやです。』

「へえゝ（笑）逆らうの？」

『はい。当然です。』

「ああゝ友好的にしたいのになあ」

『誰が手を貸すかよ（笑）』

「あん？てめえぶつ殺す！！」

「なめてんのか？こっちは何人いると思ってんの？（笑）」

ふーっ。深呼吸、落ち着かせる。否、感情を冷酷にする。

「うらあああー」

不良（A）がパンチを繰り出す。遅い…

かわしてその腕を掴み背負い投げの要領で投げ強く床にたたき付ける。

「がつ…」気絶したか…。

『どうした？殺すんだろ？』

他にまだ五人いる。「五月蠅い。黙れ！！」

蹴りが来る。

簡単に回避する。軸足を払って大外狩りのように叩きつける。

「ぐっ…。」

気絶。

何人かは気絶。後は痛みでうずくまる奴などそして、あとはリーダー格の男奴だけだ。

「クッソオオ！！」

懷からナイフを取り出す。『そんなもので僕を殺すのか？』

「本気でぶつ殺す！！」

ナイフを構える。頭が熱くなってるなこいつ…。

ブンッ ブンッ

単純な切り付け。しかし振るのには慣れているのか素早い！一撃目は油断して少し切られる。二撃目は軌道を読んで簡単に回避。

ヒュン

突きを横にかわしその腕を捻り関節をきめる。

「痛っ！！」

同時に握っていたナイフも落ちる。そして……

「何をやっている……！」

体育教師が怒鳴り声をあげ教室に入って来て僕らを引き離れた。騒ぎを聞き付け他の残っていた生徒も見に来る。

「どういうことだ？古木！貴様がやったのか……！」
「はあ……まあ……。」

めんどくさいから曖昧に答える。

「そうなんですよ先生。いきなりこいつが……。」

リーダー格の男が言う。自分達は無実でいきなり襲われた。と言いつ出した。

「なっ……。」

「酷いんすよ？生意気だつて言つて殴りかかって……。」

「そうなんすよ？」

回復したのか他の奴らも媚びた笑いで言う。

「とりあえず。職員室に来い。」

「分かりました。」

「……。」

（ちっこいつら……）

奴らの気が向こうに（体育教師）いった瞬間あいつの落としたナイフをハンカチで包み拾い懐に隠す。

かくして職員室に連行され…。僕は床に正座させられる。

「どういうことなんだ？」緊急で教師を集めたらしい…。みんなこっちを見てる

「こいつがいきなり殴りかかって来て…。」

「そうなんすよ…。酷くないですか？」

「どうなんだ？古木。」

「……………」

おいおい自分は無実つか笑いが込み上げてくる。

「何笑ってんだ！！古木！！」

ガスッ

殴られる。投げてよかったが教師を投げて退学になりたくないの
で我慢する。『痛てて…。いやくだらないなあ…』と思つて。『

んだと？』

「ぶっ殺すぞ！！」

『だいたい殴られたのは誰？何処？』

「えっと…」

『いきなり躓く。嘘つくならあんたら団結しなよ（笑）』

「混乱してるだけだ…。」『あとなんで僕のクラスで喧嘩したのか
な？襲うなら廊下とか。あんたらの教室だろ？』

「うっそれは……………」

『そしてこれ…』

ナイフを出す

『こんなもん使ってる時点で駄目だな（笑）信用ないよ。』

「それは俺達じゃねえ。無実だ！」

ちっまだ言い逃れるのか……………なら

カチッ

『…………いやです。』

「へえ〜（笑）逆らうの？」

『はい。当然です。』

「ああ〜友好的にしたいのになあ」

カチッ

「それは……。」

『ボイスレコーダー。いやあ文明の進歩って素晴らしいなあ。もう少し前のも…………』

「くそっ俺達が悪かった」いきなり罪を認める彼等。

向こうが仲間になれって誘いを断ったからこうなった。ということになった

結局罪は向こうにあるが暴力を振るうのが駄目だったのか一週間謹慎になった。ボイスレコーダーは証拠品として没収。

そして解放される僕ら。

あいつらも出ていく。その前に

『おい』

彼等に声をかける

『次は無いぞ？分かってるよな？』

「ひっ!？」

これでいいだろう。

こつん。軽いげんこつを喰らう

「こら。不良学生。」

「ふふ大変だったね」

月下先生と保健医の田辺（たなべ）いずみ先生だ

おっとりして優しい女性。髪は後ろに纏めている長さは肩より長いぐらい。

『まあ…暴力を振るっただけからしかたないですね。』

「まったく君は……?!」

いきなり近づく月下先生。学生服をとりYシャツにさせられる僕。そこには血が滲んでいた。

「これどうした?」

『えっと切られた?』

「なんで疑問なんだ君は…いずみ、こいつ保健室で治療してやれ」
「うんわかったわ。行くわよ司君。」

職員室に一人になる私。

「まったく…司は…」

一人つぶやく私だった。

『染みるう。痛いよお。やめてええっ』

「司君?女の子みたいな声辞めて…。キモイよ?」

『酷っ!』

「だけどよく遙ちゃん気付いたね。愛の力?」

『いや。ただ学ランが切れてるのに気付いただけだと思います。』

「へえ、分かりあってるのね。」

『いえ。他の先生が気付かないだけです。』

「そう?」

『そうですよ。』

「あーあと。遙ちゃん来るまで待ってて」

『へ？なんですか？』

「いやあ……その……本当は保護者に来てもらっただけ……」

『ああ、はい分かりました。』

「その……」

『気にしないで下さい。』笑顔で言う。

「うん。ありがとう。じゃあ先に帰るね。」

『あっはい。さようなら』

「ばいばい」

一人になりすることがない僕。

『んー何すっかな』

しまった遅くなった。早く保健室いかないと……。
ガラガラ、電気が着いてなく暗い。

「司？」

『んっ……………ZZZ』

「寝てるのか」

司は机で寝ていた。ベッド使えばいいのに……

『ヘックションー！……………ZZZ』

Yシャツたげならさむいだろうと思ひ学ランに手をかける
ゴトッ

「ん？これはボイスレコーダーさっきのやつじゃな
ピッ

落としたせいかスイッチが入ってしまったようだ

「よう！ー！古木」

『何ですか？』

ピッ

そうか…司は私のせいで…。

「ごめん。司。」

『気にしないで下さい。』

「っ！？起きてたのか？」『いや。それ落とした音で…』

「そうか…。なあコレなんで証拠に使わなかった？」『えーと。黙秘権を……』

「駄目。」

『えーとアレでだめなら使おうかなつと……先生に迷惑かかると思つて…。』

「バカッ…」

ギョッ

先生に抱きしめられる僕。何が起きたか理解する顔が赤くなるのが分かる。

「お前は何でも一人で抱えようとする…たまには私や周りの奴に頼れ。迷惑かけたっていいんだ。」

『はい。ごめんなさい。』

「あと…そつ、それとだな…わつ、私の為に体をはって…ありがとう。」

耳元囁かれる。多分先生の顔も真っ赤だろう…。

体を離す僕ら。先生は顔を真っ赤にさせ俯いている。『かつ帰りましょう？』

「ああ。」

たいした会話も無く家につく

『また来週』（笑）『ああ』

互いに家につくが、まだドキドキしている二人だった。

一週間たって学校へ行くと不良達は退学していた…。そして、自分には『気に入らないと誰であろうと、ボコボコにする』という危険な称号を頂いた。（新聞部の新聞の見出しより）

それ以降人付き合いは余りしなくなった。

第4話（前書き）

待ってた人（いるのかな？）お待たせしました。

第4話

カチャ キー ガチャン!!

『っ……ん?』

屋上でそのまま眠ってしまったみたいだ…。
時計を見る…。ヤバッ昼休だ!!

『ん』

背中を伸ばしてると後ろから

「やっぱりここにいたのか…」

『先生…』

月下先生がいた。

「何していたんだ? ホームルームと四限までサボって…」

『いやゝスッコーンと寝ちゃいました。アハハ』

「笑ってる場合? 昼からはでるんだぞ?」

『はい。わかりましたあ』

教室に戻ろうとすると

「……いいのか? 本当のことクラスのみんなに知って貰わなくて…」

「心を見透かされたかな…」

「君は嫌なことがあるとよく屋上にいる」

鋭いなあ…先生。

『ええ…。まあいいですよ。そのことわ…』

「どうして?」

『まあ…相手に暴力を振るつたのは事実ですし……。あの人は気に入らなかつたし。真実話すと先生に引越される(収入が減る)可能性が……。』

「でも…」

何か先生が言おうとしてるが気にしないで教室に戻る。一人で抱えようとする。その言葉が思い出される。でも僕は誰かに頼るなら頼らず抱える。誰かに迷惑なんてかけたくない。

でも孤独は嫌だ。誰かと話したい。遊びたい。繋がっていたい。嫌な性格だな……。

階段を降りながら苦笑いする僕だった。

少し前

私は昼休み月下先生を見かけた。何で一人で屋上に向かってるんだろっ？……。後を追ってみることにした。

ガラガラ

教室に入る。

わあ……みんな目を反らした……。

「授業サボって何してたの？」昇が話しかけてくる

『睡眠。いやー昼まで寝るとわ……。』

「昼飯は？」

『弁当モテキタル』

「なんでカタコト？俺も弁当だから一緒に食べない？」

『イイデスヨ。』

「カタコト辞めて」

弁当食べる僕ら。

食べ終わり。そろそろ数学（五限）始まりそんな時間……。

ガラガラ

漣が教室に入って来た。そしてこちらに向かって来る。何か決心した顔で

「ねえ司…。」

「ん？何お金ならありませんよ？」

「違う！！」

大きな声で言う。みんなが何事かとこっちを見る。

「怒るなって…どうしたの？」

「司。私本当の事が知りたい。」

キンコンカンコンチャイムが鳴る

自分の体が冷たくなる…。さっき会話聞かれた！？

「なっ何のこと？」

自分でも下手くそな演技だなあと思った

「一年の時、司がやったことの真実。」

周りの人達にも聞こえたのだろう。ざわざわ騒ぎ始めた。

「えーっと…」

「真実？俺も興味あるな…。一年の冬頃転校してきたから事情はわかんないから」

昇も真面目な顔で言う。

「授業開始のチャイムがなったしまった今度の機会に…」
司は逃げ出した。

「いいさ、構わない続けなさい。みんなも知ってたそうだしね。」
しかしまわりこまれてしまった。

「先生…。」

月下先生がいつの間にか教卓にいた。

「逃げないで…。本当の事教えて」

澪は言う。

ちっ退路なしか……。

『わかったよ…。どこから話せばいいのやら』

僕は説明した。

（月下先生目当てと言っつのは伏せて。仲間にならないかという誘いを蹴ったことにして）

私は何であいつがあんなことをしたのか知った。

あと司は

『嘘だと思っなら体育の渡辺先生に聞け。』
と言った。

でも私は嘘ついてるなと思った。あいつは暴力を振るっくらいなら逃げる。それに彼らの仲間に誘われる理由が無い。

私は真実が知りたいのに……。

「司……う

「もういいだろう？嘘をつかなくて」

言おうとしたら先生が喋りだした。

「君達には本当の真実を教えてやる。」

先生がポケットから何か取り出した。

『先生それは………なんで？』

司は驚いてる。

「君の部屋から持ってきた。」

黒い笑顔で答える先生。

あれは何だろうボイスレコーダー？
カチッ

「これが真実よ。みんな納得できた？」

私は納得した。多分みんなもそうだろう。

キンコンカンコン

ちょうどいいタイミングでチャイムが鳴る。

「今日の授業はここまでだ」

教室を出てく先生。

司もそれを追って行く。

第4・9話（前書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

第4・9話

所変わって保健室。

『先生？どうしてあんなことしたんですか？』

「……黙秘権を」

何か言い訳をする先生。何故ここにいるかという職員室じゃ周りが気になるし、屋上じゃ芸が無い……。幸い田辺先生や寝ている生徒はいないからだ。

「……………」

何も喋らない先生。

「……………」

対抗する僕。ついにつぶらな瞳での視線も足しておく。

「……………はあつ。負けたよ」

勝利つとガッツポーズしてると

「今日の朝のホームルームでな…、みんな司が居ないと知って何だか嬉しそうにしててな……。私は君のクラス担任になったのは初めてだろう？」

『ええ』

「司がみんなに恐怖の対象に見られてるのが悔しくてな……本当は優しいのに（小声）」

最後の方は聞き取れなかったが、理由は何となく理解した。

司に説明し終わったので

「説明は終わったから職員室に戻っ『ちょっと待って』
なんか笑顔が怖い。」

『理由は理解したけどーなんでソレ（ボイスレコーダー）持ってる
のかなあ？』心なしか言葉遣いが……

「それは三限の時に帰ってだなあ……」

『不法侵入したんだあ？この場所分かってことは何回もしたよね？』

「そっそれは……。」

『したよね？』
怖い

「しました。ごめんなさい」

『んー駄目許さなーい。罰ゲームう』

「っ何する気だ？」

『目閉じてね〜。』

言われたとおり目を閉じる。

何か近づく気配がした。

先生が目を閉じてる。心なしか顔が赤い……。
自分の髪を縛ってるゴムを取る。

ファサ顔の横に髪が触れる
さあてと

先生の頭の側面に触れる。ニヤリ

『目を開けていいですよ。』
目を開ける

「なっなんだこれは!!!」

ツインテールにされていた
『可愛い先生（笑）』
からかう司。

「司!!」

髪どめを取ろうとする

『取っちゃ駄目ですよ。家帰るまでそのままですよ。』

「何!？」

『ソレが罰ゲームです。取ったら更に罰ゲームですからね』

「ハアッ（溜息）わかったよ」

『それと今日は疑いを晴らしてくれて、ありがとうございました。
じゃっさようなら。』

背中から鞆を出して帰る司。

「あっまだ授業が……」
「可愛いー!!!」

止めようとして、いずみに邪魔された。

その後は散々だった。職員室で

「『可愛い！！』」「『可愛い！！』」

ホームルームの為教室行く途中に

「可愛い！！」

「萌〜！！」

「はっ…反則だぁ！！」

いろいろ言われた。

教室でも同じ事を言われて夕飯のときにも水上と桐原にも言われ大変だった。

第5話（前書き）

お待たせしました。

第5話

目が覚める。時計は六時半をさしている。今日は土曜日だから休みか……。

『んー何すっかなあ……』
とりあえず飯作ろう。

朝食を済ませ。掃除、洗濯をする。掃除を終わらせて洗濯物を干している。

「おはよう司ちゃん。」

「おはよーお兄ちゃん」
隣から声がした。

『おはようございます夏月さん。秋菜ちゃん』

「今日ねママと一緒に水族館行くだ。いいでしょ？」

『羨ましいね。』

「えへへ、お兄ちゃんも一緒に行く？」

『悪いからいいよ。』

「ええー！？行こうよお。」

「司ちゃんどうかしら？」夏月さんが言う……。秋菜ちゃんそんなうるうるした瞳で見ないで……。

考える。今日は雨の心配はないし。今月の家賃もみんな持って来たり特に心配はないか。

『分かりました。一緒に行こうか』

「わーいお兄ちゃん大好きー」

飛び付いてくる秋菜ちゃん

ガスッ！！

痛い子供なのになんて体当たり。

「あらあら…フフフッ」

笑ってないで止めて下さい。

こうして何故か僕も水族館に行くことになった。

夏月さんの車に乗って行く車内では秋菜ちゃんがはしゃいでる。

「楽しみだね」

秋菜ちゃんが笑顔で言う。『そうだね。』

「ママ。イルカショー見ようね。」

「はいはい。」

暫く会話していると水族館に着いた。

「早く行こ。」

夏月さんと僕の手を引っ張る秋菜ちゃん。

入口でチケットの購入で

『ここは僕が…』

「私がだすわ…」

なんてやり取りをし（夏月さんの勝ち）入場。

「わあー。すごい！」

一層はしゃぐ秋菜ちゃん。『そうだね』

色んな魚などを見る。

『夏月さんこの蟹すごいですよ。』

「あらあら、この爪の形が…」
『もう少しこの足が…』
「ママ達もうちよつとメジャーなので盛り上がるつよ…」
なんて注意もされ……

お昼になった。昼食を食べる夏月さん手作りのお弁当だ。
「どうぞ」

「『いただきます』」
唐揚げを食べる。

『おいしい』
下味もしっかりしていて冷めててもおいしい。
『この味付けどうしてるんですか?』

「ああ…、それはね…」
料理の話をしてると

「お兄ちゃん。あーん」
という攻撃が来た。

『へっ?』
マヌケな声を出す。

「あーん!!」

この卵焼きは回避出来ない。必中かけたなコレ
『……あーん。んぐんぐ』

「おいしい?」

『うんおいしい』

「私がつくつたの!!」

笑顔で答える

『才能あるよ』

「えへへ…ありがとう。」と褒めると
「司ちゃん?あーん」

夏月さんまで?!!

『ふえっ?』

「だって秋菜だけズルイじゃない?」

『ええ...』

「はいあーん（はあと）」若干周りの目が痛い...

『あーん。んぐんぐ』

「おいしい?」

『はい、おいしいです。』

「フフフツありがとう」

昼食を終えて1時半からイルカショーなので早めに会場に行つて少し後に座る。

「もつと前にしようよ」『ここが1番だよ。まあ始まってみればわかるよ』

「お待たせしましたーイルカショーのはじまりですー」イルカの調教師のお姉さんが出て来る。

暫くしてイルカショーが始まる。イルカが水中から勢いよく飛び出す。そして

ザバーン

再び水中に戻る。

その時凄く水しぶきが前の席の人達にかかる。

キヤー冷たーい
なんて声がする。

『ね?』

「なるほど」

「じゃあ、今からイルカに餌をあげたい人」

会場にいた子供たちが『はいはい』と凄まじく連呼する。

もちろん

「はい。」

秋菜ちゃんもだった。

「お兄ちゃん達も手あげて」

催促されたので

『……はい』

「はい」

あげると

「じゃあその眼鏡で髪後に結んでる人達」

へっ? 僕ら? 指を自分に指すと…

「そう!! それではステージにどうぞ!!」

拍手で迎えられる。

こっちから見ると…うわ人多いな…

「はい!! じゃあこの魚あげて下さいね」

『……』

作業的にあげる僕

「それっ!!」

「どうぞ」

楽しそうにあげる夏月達

『あっ！！』

一匹足元に落としてしまう。

それを取ろうとイルカが突っ込んでくる

ガッ！！

足払いされたようになり

ザバーン

水に落ちた。うお！！もがく。やばっと思っただら
イルカが押し上げてくれた。

「司くん！？」

「お兄ちゃん！？」

「アハハハハハ。」

会場の子供たちは落ちたことが可笑しかったのか笑っている。
ザバッ

すぐに上がってくる司くん

髪留めがとれたのか前髪で顔が全部隠れてる。

『ぶはあ！！いやーびっくりした。』

前髪をかきあげて顔を出す司くん

「へっ？誰？」

見慣れぬ美少女（少年）？がいた。

第5話（後書き）

最後の部分（素顔を見せる）がやって見たかったです。そのため
にわりと長文に…
夏

月さんは普段はちゃんづけです。シリアス？時はくんで呼びます

第5・5話（前書き）

お待たせしました。待ってた人ごめんなさい。

第5・5話

「へっ？誰？」

いきなりそんなこと言われた。

『司ですよ？』

眼鏡をしてないから、どれが夏月さんかわかりにくい。

「ホントに司くん？ああ・・・水に落ちたから・・・」

そんな、ら ま1/2じゃないんだから・・・。

『いえこれが素顔なんですが・・・』

何とかイルカシヨールを終え濡れた僕はスタッフルームへ案内された。

『へっくし！！』

「ああ、こっちのシャワールーム使って。服は洗濯するから置いておいて」

イルカの調教師のお姉さんが言う

『はい。』

がちゃ

ん？これが蛇口でお湯はこっちだな・・・眼鏡ないと不自由だな

蛇口をひねる

ザー

『温かい』

そういえば代えの服と下着どうしよう・・・

「代えの服と下着ここにおいとくね」

『あつ、はい。ありがとうございます。』

「ごめんなさいね今日は、」

『いえ、こっちの不注意だったんで・・・気にしないで下さい。』

「ありがとう・・・」

ガチャ

シャワーを浴び終わり服を見る

これ全部売店で売ってるやつだ。魚がプリントされてる・・・。

「着替えた？」

『あつはい。』

「じゃあ、こつち来て？」ソファアに座る

「今日は本当にごめんなさい。あとコレ」

壊れた眼鏡と家の鍵と濡れた財布を渡される。

『げっ…これは見事に壊れてますね。』

レンズにヒビ。フレームぐにやぐにや。ええつと家にコンタクトレンズあつたよなあ…。

「携帯電話は見つからなかったの…ごめんなさい。」『ああー僕、携帯持って無いんですよ。』

「えっ！？そうなの？珍しいわね。あと濡れた服は後で送るわね。住所教えてもらっていい？」

『あつはい。』

メモに書いて渡す。

『もう戻っていいですか？』

「あ、うん。今日はごめんね。あと、ご来店ありがとうございます。た。」

よく謝る人だなあ…なんて思いながらスタッフルームを出る。

『どうしよ？夏月さん達どこだろ？』
キヨロキヨロしてると。

「司ちゃん？よね多分…」後から声がする
『その声は夏月さん？』

「正解」。災難だったわね。」

『ええ。あれ？秋菜ちゃんは？』

「寝ちやったわ。はしゃぎ過ぎたんでしょうね。」

『そうですね。閉館時間も近いし、そろそろ帰りますか？』
「そうね。帰りましょ。」

後部座席ではスースーと秋菜ちゃんが寝ている。「司ちゃん？起き
てる？」『ええ。』

「今日は楽しかった？」

『はい楽しかったです。夏月さんは？』

「楽しかったわよ？司ちゃんの顔見れたし」

『えっ！？』

「こんなに綺麗だったなんてね」。女の子と間違えちゃうくらい。
『からかわないでください。見慣れた顔なんで特に何も思わない
んです。』

「へえ」お化粧したら完璧に女の子なのに…。」

『怒りますよ？女の子みたいって小さい頃凄まじく言われた台詞な
んですから…。』

「あらあら、ごめんなさいね。」

『そこ笑いながら謝らない！』

家に着く

『今日はありがとうございました。』

「どういたしまして。」

辺りはもう暗い。

「ねえ司くん？」

『はい。』

「私ちゃんとあの子の母親に、なれてるかしら…」

『えっ！？』

「不安なのよね」

『突然な質問ですね。』

「ええ、何となく司くんに聞いてみたくなって…。やっぱり父親がいないと駄目かしら…」

『んーわかりません。僕らはずっと爺さんに育てて貰ってたんで…。』

『

「そつか…。変なこと聞くけど両親がいたら…。とか思わなかった？」

『無いですね。爺さんだけで充分でしたよ。だからあんまり気にしない方がいいですよ。』

「うん。悩んだってしかたないか……。よし！頑張る。」

『その意気です。それにその気になれば夏月さん美人だから簡単に旦那さん見つかると思いますよ？』

「またお世辞？」

『いえ…。本心です。』

「ふーん。なら司くん貰おうかしら…美人だし、家事もできるし、優しいし…」

『またまた御冗談を…それにまだ僕16デスヨ?』

「気にしないわよ。」

『えっと…その…』

司はまごまごしている。

「…冗談よ。（少しね）」

『その冗談は勘弁してください（泣）』

「フフッ。今日は色々ありがとうございます。またね」

バイバイと手を振って帰って行く夏月さん。

『……疲れた。帰って寝よ。』

今日は早めに寝ようと思った司でした。

第5・5話（後書き）

現在忙しく更新が余りできません。でも頑張っ
て書いてくのでこ
れからもよろしく願います。

第6話（前書き）

リアルにすることが多くて大変です。更新遅くてすいません。

第6話

今日は日曜日。

眼鏡の代わりにコンタクト髪を纏めるゴムが無し。

『うーんコンタクトはなんか嫌なんだよなあ…。』
目に入れるのが嫌いなんだよなあ

なんて思いながら掃除をしていると

ガラガラ

「ごめんくださーい。司いるー?」

この声は月下先生だ。

『はい。』

玄関へ行くと…

「えーつとたしか…その顔は……司だよね?どうしたの顔(眼鏡)」

『いやゝ色々ありました…』

昨日のことを話す。

「へえーそうなの。」

『先生はなぜここに?』

「ああ…今日買い物に行くから荷物持ちに君を誘いに来た。」

『デートですか？わーい』

「荷物持ちだ。」

『ええーめんどい。』

「金曜の帰りのホームルームサボったよね？その罰に課題出してあげようか？」恐いなあ…。ツインテールが効いたんだなあ…。

『酷っ！分かりましたよ。手伝いますよー。』

まあ眼鏡屋に行きたかったからいいかと思ひ、支度をする僕。
んーこんなもんかな？

『先生。お待たせ』

「じゃあ行こつか。」

『何処に行くんですか？』

「市街の方に…」

『結構遠出ですねえ』

先生は車はもつて無いから（免許は有り）電車で行くことにした。
此処から駅は近い。徒歩5分。大学にも近いので卒業したら是非。
…じゃなかった…片山から市街は電車で50分ぐらいだ。

電車内にて…

「あの二人綺麗だわ…姉妹かしら？」「美人だなあ…」

「オイ。ナンパしてみない？」

『僕男なんだけど…。』

「プツ。ククク。」

『笑わないで下さい。』

なんて感じな二人でした。

市街につくと

やっぱり都会だな…人が沢山。

『先生。今日は何買うんですか？』

「うん？服とかかな…」

『何処で？』

「歩きながら決めるさ。あつここ入ってみよ！」

『あつ！待って下さいよ』

先生はテキトーに服屋に入って服を選ぶ。

「これはどう？司？」

『んー似合うと思いますよ？』

「はつきりしないなあ…」『可愛いですよ。』先生が赤面する。熱
でもあるのかな？

「うん。これ買おう！」

レジへ行く先生。試着しなくていいのかな？

「次のお店いくよ！司！」荷物を僕に渡す先生。

先生楽しそうだなあ

しばらくして

結構買ったなあ。両手にいっぱいだよ…。お昼ご飯食べたよ…。

『先生お昼ご飯にしましょ?』

「ん? (時計をみる) そうね食べよつか。」

『何処で食べます?』

「その辺でいいんじゃない?」

適当だな先生…

『じゃあそこで…』

近くにあった定食屋へ入ってく僕らでした。

第6・5話（前書き）

あけましておめでとうございます。読んで頂いて感謝の極みです。

第6・5話

定食屋に入る。

「いらつしゃいませ。あつ先生!？」

澪がいた。

「林、バイトか？」

「あー、家の手伝いなんで…」

看板に林食堂つて書いてあつたな…成る程。

「そうか」

「そうなんです。でその隣の美人は誰ですか？」

美人? 誰が? 澪がこちらを向く。そういえば素顔? 知ってるの学校の生徒では居ないな。

実際数える程しかない

『初めてまして。僕は月下 社^{やしろ}遥さんの従兄弟です。』

うむ、騙してみよう。

「あつそうなんだ。よろ…『ゴン!』!」

先生の拳が頭にヒット。

「『司』。嘘をつくな。」

「え!？」

痛いです…言葉にならないです。ばらさないで下さい。あれ?

『オーイ澪?』

固まってる

『おい

「ええええええ!!!??」

ご飯を食べてたお客さんたちが何事かとこちらを向く。

「どうしたの!? 澪?」

綺麗な女性が厨房から顔を覗かせる。

「何でもない!!! 知り合いが来ただけ!!!」

なんかごまかす澪さん

顔を掴まれる。

「先生！！これ本当に司？」

顔をフニフニされる。変装じゃないぞルパ　じゃないんだから……
「残念ながらそれは司だ」『ひほおいれふれえ（ひどい先生）』
手を離す澪。

『痛いな～客だぞ。丁重に扱え。』

「これが司？！……ブツブツ……」下向いて独り言。

『あの～そろそろ席に案内してくれませんか？』

澪の顔を覗く

「あつ！？ゴメンこちらどうぞ～」

席に案内される。

「ご注文がお決まりになったら御呼び下さい。」

去って行く澪。うん接客モードだな。笑顔がなんか胡散臭い。

『何食べます？先生？』

「んー日替わり定食かな……司は？」

『この鯖の味噌煮定食にしようかと……』

「……おっさん好みだな……」『ほつといて下さい！！すいませーん』
澪を呼ぶ

「はい」

『日替わり定食と鯖の味噌煮定食下さい。』

「はい少々お待ち下さい。」

『ご飯食べたあとどうします？』

「司はどうしたいの？」

『眼鏡を買いたいです。』

「そついえば、いつも眼鏡なの？」

『目に入れるのが嫌いなんですよ。』

「へえ。」

なんて他愛のない会話をしていると

「お待たせしました。鯖の味噌煮定食は？」

『僕です。』

「日替わり定食はこちらですね。」

テーブルに置く。

「伝票はこちらに置いておきます。」去っていく漑。

『「いただきます」』

食べる僕ら

食べ終えて会計を済ませようとレジへ…先程の綺麗な女性がいた。会計を済ませると女性が話しかけてきた。

「先程は娘が失礼しました。漑の母の梓あずさです。」

『えええ！？こんな美人が？姉かと思いました。』
びつくりする僕。

「あらあらお上手ですね。」

笑顔の梓さん

『いえいえホントに…』

「お母さんを口説くな」

スパァン

漑に頭を叩かれる。いきなり姿を表せやがって…。やるな…

「お母さんも嬉しがらない。恥ずかしい…」

『痛いな自己紹介をさせてよ漑。』

「私は担任の月下 遥です。」

あつ先越された

『同じクラスの古木 司です。娘さんにはお世話になってます。』

笑顔で挨拶。こっちみんな見てる…あれ？みんな顔が赤い風邪かな？梓さんが僕らの前に来る。

「娘をよろしく願います。」僕らに頭を下げる梓さん。いい…

母親だな…僕のは…嫌な記憶だ…

『はい任せましたあっ！！何なら嫁にでも…ああもちろん梓さんをですよ？』

「えっ？／＼」

テンション上げよう

「任せられるかあ！！！」ゴウッ！！

背中に正拳突かよ危なっ！！

緊急回避！！

前に跳ぶ…やばい前に梓さん居るから避けるな…

バキヤ！！

『ゲフッ』

前に吹っ飛ばされる僕。息できない…あっ！？

ドンっ

「キヤッ」

梓さんにぶつかり倒れる梓さんと僕…。このままだと梓さんが僕の下敷きに…。抱き着いて体の位置を代える

ドンッ！

『げふう！！はあっ…。』

床硬えなあ…息できないよ。何か柔らかいなあ…梓さんが胸にいる…。ヤバイ！

「何お母さんに抱き着いてんのよ！！」

「つつ／＼／」

赤面中な梓さん。回復する前に頭を蹴ろうとする漣。ああ鬼が見える。『っ』

息できないから声でない…。

「落ちて着け漣。それはマズイ。」遙さんが止めてくれた。

ああ女神がいる。

何とか漕に落ち着いて貰う。早く出よう

『ご馳走様でした。』

「また来て下さいね／＼。」

「二度と来るな」

店を出る。

『あー痛かった…。』

「……………」

あれ、怒ってる？

『どうしたんですか？』

「別に…」

『機嫌直して下さいよ。』

「……………ふう。わかったよ。」

『じゃあ。眼鏡を買いに行きましょう』

先生の手を引っ張る。

「っ…／＼。引っ張るな」

何か照れてる先生。

眼鏡屋に着く。

『んゝフレームどれにしようかな。』

いろいろ掛けてみる。

「適当でいいんじゃない？」

『んゝ。先生も掛けてみませんか？』

「何で？」

『いやただ見てるのもつまらないでしょう？まあ、眼鏡姿の先生も

見てみたいんですよ。』

「うん…仕方ないな。」

どこか嬉しいそうな先生。『これなんてどうです？』

「んっ…。どうかな？」

『似合ってますよ。かわいい

「可愛いい〜」

ん？声ができる方を向くと

田辺先生がいた。

第6・5話（後書き）

話数に0・5とかは変ですね。いずれ繋げておこうと思います。

6・6話（前書き）

長らく待ってた人（いるねのかな？）お待たせ

6・6話

「……………」

ヤバい弄られる。

「遙ちゃ〜ん可愛い。眼鏡の遙ちゃんなんてレアだわ〜」携帯を取り出すいずみ先生

こちらには気づかないようだ。

「こら抱きつくな。カメラで撮ろうとするな。」

美人二人が並んでるから店員も見てるよ…。

「司！そこで他人の振りしないで助ける」

「古木君もいるの？」

ふっ…甘いな先生。いずみ先生は僕の素顔を知らないのさ。この眼鏡なんてどうかなあ…アハハハ

「〜」

「そうか…そんなに私の課題がやりたいのか」
凍えるようなオーラが放出されている…怖い…

『アハハハ〜僕、古木司でえっす。』

ヘタレなので即答する。

「この娘が？またまたあ…古木くんがこんな

『いずみ先生は僕の兄さ

「司くんだわ」ギッ！？」

先生それ以上言わせないように足を踏まないで下さい痛いです。

『……と言っわけで遙先生の荷物持ちちゃっています。』

「デート？」

「どうしてそうなる…」

「いずみは何でここにいるんだ？」

「買い物よ。お店の外から遙ちゃんが見えたから、何してるのかな？と思つてね。」

二人は話こんでるようだ。

『んゝとりあえず眼鏡これにします。』

二人は聞いてないようだ

何の面白みもない一般的眼鏡をとる。

『店員さん。これ下さいな』

「はい／＼／＼こちらで視力計りますので、あちらへどうぞ。」

店員なんか照れてるな…なんでだ？

「レンズが2時間後に出来上がりますので…、2時間経ちましたらお越し下さい。」

『はい。』

まだ先生達は話をしているようだ。

「司ちゃんの…の服……みない？」

「ほう……なら…」

何か嫌な予感がする…

『あと2時間かかるみたいです。』

先生達に話しかける。

「司ちゃん？これから…司ちゃんの服選びしない？」先生達の目が何か面白い玩具を見つけたように輝いている。

『いえ…服なら間に合ってます。』

「大丈夫だ。試着だけで買いはしない。」ガシリと両方の腕が掴まれる。

『あの…』

ギリッ

「何？」

『なぜ僕の両腕をホールドしているのでしょうか？』

「逃がさないためよ。」

『逃げる？』

なぜと考えながらズルズルとある所へ連れて行かれると理解できた。
くそう…

『あの…、ここは』

「なに？問題ある？」

『ここ女性服売り場ですよ？』

「なに？問題ある？」

おぎや ぎですけど何か問題でもみたいに言われても…

『僕、男、OK？』

「大丈夫だ。似合うから。」

『そう言う問題じゃなあい！！』

司の悲しい叫びが木霊した。

6・6話（後書き）

いそがしいです書くまで気力がまわりませんでした。

すみません。これからもう少し頑張

って書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3737c/>

大家さんは高校生

2010年11月17日14時33分発行